



洋館にて



momishin

僕の右手に持ったロウソクの灯火が女を照らすと、残酷な事実が辺り一帯に広がった。

世の中には見たくないもの、知りたくないものが確かに存在する。女の死体もその一つだろう。光は僕らに希望と安心を与えるが、絶望と不安が必ずしも闇から生まれてくるわけではない。どんなことでも、明らかになれば、人はなんらかの反応せざるをえなくなる。

ロウソクを女に近づけると、ますます死が濃くなっていく気がした。恐怖を感じながら、それでも彼女に接近したのは、きちんと死に顔を看取らないとなんだか気持ちがおさまらなかつたからだ。

女の死体はいくつもの部分から血を流していて、特に胸からの出血はひどかつた。おそらく彼女の命を奪った凶器は、心臓にまで達したのだろう。顔には損傷がなく、美しさの残滓があつたが、血みどろの身体と一緒に不気味なだけだつた。

一応脈を確かめようと、僕は女の手首に触れた。温かいとも冷たいとも感じなかつた。温度はともかく、脈がないことは明白だつた。肌に触れるという行為のせい、恐怖が薄れ、同時に哀れみが湧いた。

開いたままだつた女の目を、手で覆い隠すように閉じてさせて、僕は黙禱を捧げた。なにか彼女に対して他にしなければならぬようなことがあつた気がするが、思い出せなかつた。

立ち上がると、どこからか風が吹いてきた。僕は火が消えないよう、左手でロウソクの先端を守つた。いつそ灯りを消してしまえば、女の死も消えるのではないかと考えるころには風はやんだ。

これからどこに行くか、僕は迷つた。そもそもここがどこなのか、僕にはわからなかつた。電気の明かりが消えたことはおぼえているし、ロウソクにマッチで火をつけたこともおぼえている。だが、その過程や状況が思い出せない。

ポケットを探るとマッチ箱が入つていた。僕はこれをどこで見つけたのだつたか。

事態を把握するための記憶が欠落していた。記憶がないことがはっきりしている、というのも妙な感じだつた。

振り返って前方と後方を見比べると、灯りが照らす範囲は、どちらも同じような空間だつた。

探り照らして見えた壁には、両手を広げたほどの大きさの油絵がかかつていて、やけに晴れ晴れしい空の下で、女性がナイフを持った子供に追いかけている姿が描かれていた。趣味の悪い絵だ。こんな絵の近くで殺された彼女を、ますます哀れに感じた。

悩んでいても仕方ないので、僕は始めに自分が向いていた方向に進むことにした。

別にここは洞窟だとか、地下室だとか、そういうところではないようだつた。周りを見た限りでは、洋風の建物だ。どうやら僕が歩いている道は、廊下のようなようだつた。靴底に当たる感触は硬く、転んだらとても痛いだろうな、と思つた。

やがて大きいドアに突き当たつた。

ドアノブに手をかけて、僕は一旦ためらつた。開けた途端になにかが襲い掛かつてきたり、ショッキングな光景が目飛び込んできたりする可能性を考えた。彼女を殺した誰かが、まだこのあたりにいたとして不思議はなく、むしろ自然に思えた。

それでも僕は開けないわけにはいかなかつた。引き返してもなんの解決にもならないと思つたし、早く欠落した記憶を埋める要素が欲しかつた。どこか痒いところに手が届かないような気分が、さつきからしている。小さいネズミが僕の中で、チーズを探して走り回っているようだつた。

意を決してドアを開けると、覚悟したようなことにはならなかつた。ただ、一人の男が部屋の真ん中に置かれている長いテーブルの端に座って、巨大なハンバーガーを食べていた。

椅子があるにもかかわらず、男はテーブルに腰かけ、行儀悪くハンバーガーをむさぼつていた。生きている証を歯で刻むような食べっぷりだつた。噛むと同時に飲み、あつという間にハンバーガーの丸みを削り取つていく。

突然命が危険に晒されたりはしなかつたし、誰が食事をしていたつてかまわなかつたが、僕は警戒せずにはいられなかつた。なにせ、その部屋においても、灯りは僕の持っているロウソクしかなかつたのだ。つまり、僕がくるまで、男は暗闇の中で食事をしていたということだつた。それは殺人と並ぶくらい、非常識に思えた。

だとしてもそれだけなら、もしかして僕は男に話しかけて、悠長に事態の説明を求めたのかもしれない。お腹が減ればなにか食べたくなるのは仕方ないし、この部屋が真つ暗なのは男のせいではないだろう。

しかし、一歩踏み出して気づいてしまった。男が腰かけたそばには、なにかがべつとりとついた刃物が転がっていた。食事に使うナイフと思うには、先端が鋭くて、形状が攻撃的すぎたし、ついているものをソースと思うには、僕はまだ、彼女の死体に対する印象が強く残つていた。しかも、食べ物男の持っているハンバーガー以外、見当たらなかつた。

男は鬼神のごとき勢いでハンバーガーを食べ終わると、ナイフを手にとってテーブルから降りた。僕は後ずさつて、距離を取つた。

そこでさらに気づくことがあつた。テーブルのそばに、倒れている人間がいた。性別は男のようだつた。死んでいるのかはわからないが、服の大部分が不自然に黒ずんでいる。僕は目をそらした。わからないことにしておきたかつた。

僕が見ることで、その人の死が決定してしまう気がするのだ。

「そっちはどうだった？」

低音のよく響く声だ。僕は男を見た。すらっとした体型で、身長が高かった。ロウソクを少し高く持ち上げ、目を合わせる。彼はいかにも人の良さそうな笑みを浮かべていた。

「そっちはどうだった？」男はもう一度繰り返した。ちゃんと死んでいたか、とも言った。

「死んでいた」と僕は答える。

「よし。だけどもまだ明かりはつかないんだな。困ったもんだ」

男は肩をすくめて、口をへの字に曲げた。それでも目は笑っているようだった。彼は素の顔が笑っているような顔なのだとわかった。

「こう暗くちゃあ、気が滅入る。お前が火を見つけてきてくれたみたいだから、多少はマシだがな」

「君が殺したのか」と僕は尋ねた。

「うん？」男は眉をひそめた。倒れている人間に目を向けた。「まあこっちのほうは、そりゃ俺が殺したよ。俺以外に殺したやつがいたら、面倒じゃないか」

男がそう言ったことで、死は決定してしまった。視覚だけでなく、言葉も死を決めてしまうのだ。

「どうして殺したんだ」

「おいおい、なぜそんなことを訊く。殺さなければこっちが殺されるんだぞ」

どういうことか、さっぱりわからない。混乱よりは焦りがあった。僕は忘れているのだ。忘れているからわからないのだ。

少し、頭痛がした。

ネズミが、ネコに追われ始めた。ネコは本能からか、気まぐれからか、ネズミがチーズを手に入れるのを邪魔しようとしていた。

「わからないんだ」僕は言った。「僕はなにかを忘れてしまった。いつのまにか火のついたロウソクを持って、女を見ていたんだ。他におぼえていることもあるけれど、とにかく女が死んでいた。それが僕の記憶に残っている、一番重要なことだ」

「女？」男が不安げな表情をした。「女だって？ 冗談はやめてくれ。お前が行ったほうも、男だったじゃないか」

「でも、死んでいたのは女だった」

「やれやれ。つまりなにか？ 少なくともまだ一人残っているという計算になるわけか？」男は舌打ちをして、サッカーボールを蹴るみたいに脚を振るった。「まだ終わっていないんだ。どうりで明かりがつかないはずだ」

「どういうこと？」

「お前は男の死体を確認しに行ったはずなんだよ。この男が殺した奴だ」

男だらけで僕は少し困惑した。しかし僕も男と言うよりほかに言葉が見つからなかった。男は男だ。

男が続ける。「お前の記憶がないのは、おそらく、ペナルティをくらったんだ。知らないルールがあったんだろう。よくあることさ。問題なのは、また殺しに行かなきゃいけないということだ。その女を殺した奴をな」

ペナルティ。ルール。そう、僕は罰を受けたのだ。ちりちりとした感覚と共に、わずかだが取り戻すものがあつた。

「まあ、いい。お前が火を見つけたのが幸いだ。闇の中をせこせこ動かなくてすむ。さくっと終わらせよう」

男は気を取り直したようにパンツと手をふとももで打ち鳴らした。その姿は、どこか試合にのぞむスポーツ選手に似ていた。地元の応援団はきっと彼の活躍に期待するだろう。ただ、間違いなく殺人はスポーツではないし、ここに観客は誰もいない。

「君は僕を知っているの？」

「どうでもいいだろう、そんなことは。知らなくたって、知っているフリをすればお前にはわからない。お前が記憶をなくしているフリをしていたとしても、俺にはわからない。その程度の話さ。こんな閉じた世界じゃ、日常と演劇の区別はつきそうにないからな」

閉じた世界。そうなのだ。僕らは外には行けない。いや、外なんてない。ここが始まりで、ここが終わり。それが全てだ。

——本当に？

本当の、はずだ。

また頭痛がして、目を閉じる。心地の良い闇が僕を歓迎してくれた。また目を開けるのは、ちょっとした気力が必要だった。

「君は味方なのか」と僕は言った。それだけは確認しておこうと思った。

「さあて。一応、協力はしあっていたはずだがね」男はどうしてもよさそうに首を振った。「俺がお前を殺さない代わりに、お前は俺に色んなことを教えてくれた。今のお前はあまり当てにできそうもないが、まあけっこう、助けてもらった恩

がある。もしどうしようもなくなったら殺すかもしれないが、できるだけそれは最後に回す。そんな感じだ」

「そうか、充分だ」

僕はうなずいて、警戒を解いた。この場所では破格の条件のはずだった。それは、今の僕にもなんとなくわかっていた。

「それで、僕はなにをすればいいのかな」

「なにもしなくていい。こっちには武器がある。これは今のところ、俺のアドバンテージだ。まかせてもらえれば、すぐに終わらせてみせるさ」

男がかかげたナイフを間近で改めて眺めて、引っかかるものを感じた。どこかで見たことがある。確か、油絵に描かれていたナイフも同じ形をしていた。

「どうした？」

「いや、なんでもない」

僕は気にしないことにした。死んでいた女以上に、僕が気にしなければならないことなんてないと思った。死体に相対したときより、僕の心は彼女を意識していた。ネズミがしつこく僕の中にある彼女の通路を行き来する。ネコが手を伸ばしても届かない空間のようだった。でも、チーズは見つからない。

所詮ロウソクの灯りでは、暗いことに変わりはない。しかし、男はおかまいなしにぐんぐんと速度を上げた。視界の確保がとてもできているとは思えない空間にも、おびえることなく足を踏み入れていく。僕はどこに向かっているかも把握せず、ついていっただけだった。

僕らがいる建物は、何十万という品数を揃えたホームセンターより大きいように思えた。似たような廊下や部屋ばかりで、同じところをぐるぐる回っているのかもしれないが、おそらくもう何キロメートルも移動している。

男は疲れた様子を見せなかったし、僕も疲労感はほとんどなかった。だが、徒労や飽きに似た気持ちが浮かんできた。僕は一度、さきほど出会ったところと同じような部屋で休むことにした。

部屋には袋に包まれた巨大なハンバーガーと、いくつかのアルミ缶のコーラがテーブルの上に置かれていて、それを分け合うことにした。

ここでの食べ物はハンバーガーしかなく、飲料はコーラしかなかった。この部屋だけでなく、この建物がそうなのだ。僕はそのことを思い出していた。

「なぜだろう」と僕が疑問を口にすると、「さあな」と男が答えた。

僕はさしてお腹が減っていなかったので、コーラだけもらうことにした。ロウソクをテーブルに置き、缶を手にする。プルタブを開けてプシュっという音を聞くと、久しぶりに渴望と呼べるようなものを感じた。

口をつけて、僕は首をひねった。炭酸は爽快だったが、味がしなかった。

外装をよくロウソクで照らして確認したが、コーラに間違いはなかった。パッケージだけで中身は別物なのか、僕の味覚がおかしいのか。どちらにせよ奇妙だった。

「このコーラ、味がしない」

「味がしないならコーラじゃないだろ」

僕は中身を少しテーブルにたらした。黒い液体は間違いなくコーラに見えた。たとえコーヒーだったとしても、黒い色をした得体のしれない液体だったとしても、まったく味がしないというのは変だった。記憶だけでなく、僕は味覚まで失ったのだろうか。

「君のコーラには味があるのか」

「あるよ。飲んでみるか」

男のコーラを飲んでみても味は感じなかった。どうやら、僕の味覚がおかしくなったようだ。

「いちいち疑問を抱かないことだ」男が諭すように言った。「コーラの味がしなくなっただけで、大した話じゃない。ここでは生き残ることだけを考える。俺が言うのもおかしいが、お前は俺を殺すことも考えたほうがいい。ここではそれが当たり前なんだ。俺とお前の今の関係のほうがおかしいんだから」

僕は曖昧にうなずいたが、疑問は尽きなかった。疑問を感じる機能が自分にあること自体、不自然な気がした。記憶が多少なくても、ある程度僕はこの世界を知っているくせに、どうにも適応できていないのだった。

僕は一体何者なのだろうか。

「記憶をなくす前の僕と、今の僕は、なにか違うところがあるかい？」

「一番の違いは役に立たないことだな」

男は笑った。僕は笑っていないのかわからず、口の端をわずかに曲げただけにとどめた。

「僕はどんな風に役に立っていた？」

「ハンバーガーを見つけるのがうまかった。人が隠れている場所も、透視ができるのかと思うほど早く見つけたな。お前の指示通り動けば、だいたいうまく事が進んだ」

「ふうん……。君から見て、おかしいところはあった？」

男はふむ、とあごに手をやった。

「そうだな。よくここから出たいと言っていたよ」

「ここから出たい？」

「俺にはそんな考えがなかった。そもそも、外なんてものがあるなんてな。お前に言われて初めて現状を不思議に思った」

「待ってくれ」僕は手のひらを男のほうに向けた。「僕がそんなことを？ 君だって閉じた世界がどうか言っていたじゃないか」

「そりゃ、お前に影響されたのさ。お前の言葉には、どこか説得力があった。話を聞いているうちに、なんとなくおぼえちまったんだな。協力体制だって、丸めこまれていたようなもんだ。別にデメリットがあるわけじゃないからいいけどな」

僕はここが全てだと思出したばかりだ。いや、それなら「閉じた世界」なんて言葉は出てこない。なにかちぐはぐだった。僕という完成されていたジグソーパズルを一度バラバラにして、目立ちやすいピースをわざわざ黒く塗って個性を消してから、また組み直したかのようだった。

一番の問題は、それでも僕は僕だということだ。別のジグソーパズルになってしまえばいいものを、一部のピースの絵柄がわからなくなっただけで、あとは変わらない。しかも、黒く塗られているという事実を認識してしまっているのだ。

ネズミはチーズを探すのをやめない。別にネズミが生きるためにはチーズを食べなくてもいいのだ。ハンバーガーでも、味のしないコーラでも。しかし、僕の中のネズミはチーズを求める。それがネズミの使命だからだ。

使命。そう、使命だ。僕のチーズは――

「避ける！」

突然、男が叫んだ。

僕はとっさに反応できず、「え？」と聞き返そうとした。だが次の瞬間、男に突き飛ばされて僕は床を転がっていた。

「なにを――」

僕は口を開いたまま固まった。男がナイフを構えて、さきほどまで僕が立っていたところに出現した何者かと対峙していた。僕はその何者かの屈強な背中を見て、事態を把握した。

「そこにいると邪魔だ。どっか行ってな」

男は言いつつも、油断なく襲撃者の動きを見ていた。襲撃者と断定したのは、ナイフを持っているからだ。ここでの凶器といえばナイフなのだった。果物の皮をむいたり、ステーキを切り分けたりするナイフはない。人を殺すためのナイフだけがここにある。単純かつ明解になっているのだ。

襲撃者はどこから入ってきたのだろうか。瞬間移動をしてきたとしか思えなかった。僕があちこちに目を走らせていると、男が天井を指差した。そこには人一人は充分に通れる穴が開いていた。

「早く逃げろ。あんまり気い使ってられないから」

と、そこで襲撃者が動いた。男のほうへ踏み出し、ナイフを振りかぶる。どこかぎこちなかったが、そのスピードはデタラメに速かった。

「っと」

男はあっさりの一撃をかわし、襲撃者の横腹へ拳を叩きこんだ。襲撃者はよろめいたが、すぐに男へ掴みかかる。男はバックステップし、一定の距離を取った。

襲撃者の向きが変わり、口ウソクにも近づいたので、僕はようやく顔をはっきり見ることができた。

「うっ……」

聞いていた話と、男と互角以上の体格からして、襲撃者も男だと思ったが、顔を見ても性別は判断できなかった。性別どころか、人間であるかどうかすら怪しい。なにしろ、鼻があるはずのところはほぼ平面だったし、口は耳まで裂けていたのだ。怪談で出てきそうな妖怪や怪物と言ったほうが適切かもしれない。

「なんだこいつは……？」

「考えている暇はないぞ！」

今度は男から仕掛けた。回り込むようにして襲撃者に接近し、ナイフを突き立てる。

ナイフは驚くほどあっさり、胸のあたりに吸い込まれた。痛みをうめく襲撃者。しかし、動きを鈍らせたのはわずかの間で、すぐに男の腕を取ろうとしてきた。

男はナイフを引き抜き、また距離をあけた。

「おい！」

男の声に僕はハッと、脚をもつれさせながら、慌てて部屋から抜け出した。

部屋から抜けて少し走ると、もう闇が僕を取り囲んでいた。足元に気をつけつつ、壁に手を置いて歩く。あまり離れすぎても男と合流できなくなってしまうだろう。ある程度のところで止まり、床に座り込んだ。

あの怪物はなんだったのか、僕は考えた。僕らが探していたのは男であって、怪物ではなかったのではないか。

なぜそもそも「残っているのは男があと一人」ということになっていたのだろう。確か男がそう言っていたからだが、ちゃんと説明をしてもらえば良かった。

……いや、僕は多分、納得していた。「あと一人」ということを、僕は知っていたのだ。

その残った一人というのが、僕と協力している男が殺した男が殺したはずの男。……なんてややこしいのだろう。どうして僕は男という表現しか持っていないのか。もっと違った言い回し、違った記号で表現できるはずだ。記憶の他に、機能が欠けているようだった。味覚も、表現方法も。そして僕は、欠けていることに気づいてしまうのだ。まったく、やっかいな話だった。

ふと、足音が聞こえた気がした。

耳をすませると、確かにカツコツという、硬質な床を靴が叩く音がする。僕は神経を尖らせて、息を殺した。だが、

ロウソクの灯りが見え、足音の正体が判明すると、僕はホッと胸をなでおろし、緊張を解いた。

「なんとか、やっつけた」男は、にやっと笑うと、血のついたナイフを軽くかかげた。元から笑っているような顔の彼が唇を吊り上げると、ピエロみたくに見えた。

「すごいな。あんな怪物相手に」

「見た目、だけだ。中身まで怪、物じゃ、なかった」

男は僕にロウソクを渡し、壁に背中をつけてずるずると床に座った。さすがに疲れたのか、息が荒かった。

「まだ明かりはつかないみたいだ」

「……あいつは、数に含まれ、ない、のかもしれない」

「つまり男が一人残っているのは変わらない？」

「っふう……、かも、な」

そこでようやく僕は、男の様子がおかしいことに気がついた。

「大丈夫か？」

「大丈夫、だといいいねえ」

脂汗を額にびっしりと浮かべながら、それでも男は余裕ありげだった。僕は彼の身体をよく見てみた。男の背中と壁の間から、液体がしたたっていた。

「君、血が……」

「参った、ね。こういうのは、ホント、あっさり決まっち、まう」そう言って男は咳き込んだ。口からも血が出てきた。「あー、まずい、死ぬ」

「死ぬって、そんな簡単に」

「死ぬよ。刺された、し。刺されたら、死ぬだろ」

僕は勝手に、男は殺す側の人間だと思っていた。刺すほうであって、刺されるほうではない。今実際に刺されて血を流している彼を見ても、誰でも死ぬ、という当たり前の事実より、なんだか意外だ、という感想が先行してしまうのだった。

「ほら、これ、持ってけ」

男は僕にナイフを差し出した。恐る恐る受け取ると、驚くほど軽かった。

「あー、あと、一つ。お前に教えて、おくことが、あった」

「あまり喋らないほうが」

「まあ、聞け。お前は、この建物には、窓がない、と言っていた」

「窓？」

ネズミが、チーズの香りを嗅ぎ取った気がした。

「それは、確か、大事なことだった。あとは知らん」

「……ありがとう。なんだか少し、道が見えた気がする」

「そりゃ、良かった」

男の呼吸は浅くなっていた。声もどンドン小さくなっている。血が床を濡らし、死の影は、ロウソクの淡い光でも、はっきりと映し出されていた。

「お願いなんだけど、死なないでくれないかな」

女に感じたような、哀れみがあった。男が哀れというより、死を見る自分を哀れんでいるのかもしれない。

「無理、言う……」

なおも男は喋ろうとしたが、ほとんど言葉にはなっていなかった。ただ、彼の笑っているような顔は崩れない。僕はその顔を目に焼きつけた。

僕はもう一度「ありがとう」と言い、男が死体になってしまう前に息を吹きかけてロウソクの灯りを消し、その場から静かに去った。

再び火をつけたロウソクとナイフを手に、僕は女の死体のあったところへ向かっていた。

この建物には、窓がない。それは、男を経由して記憶があったときの僕が伝えてくれたヒントだ。歩き回っている最中には、窓があるかどうかなんて意識になかった。改めて注意してみても、なるほど、一つも窓はない。

窓の役割はなんだろう。換気、採光……。外部の環境との接点だ。ここには代わりに役目を果たす設備もないようだった。まさに閉じた世界だ。

だが、あそこには――

コツンと、音が聞こえた。

僕はロウソクの灯りを消した。マッチはそれほど残っているわけではなかったが、ロウソクも短くなっていたし、なにより、僕がこれからやるのが成功すれば、もう必要なくなるはずだった。

壁伝いに移動し、曲がり角に入ったところの陰でしゃがみこんで、息を殺した。何者かの気配が、近くからする。おそらく、残り一人の男だろう。

どうしようかと考えて、僕はゆっくりと脚を前に突き出した。子供じみているようにも思うが、なにも見えない状況で足元に障害物があるというのは、かなり危険なのだ。引っかかってくれば、転ぶ確率が高い。やってきたのは男ではなく怪物である可能性もあったが、そのときはそのときだろうと割り切ることにした。あの怪物が二人以上いたとしたら、とっくに出会っているだろうという思いもあった。

ややあって、足音のはっきり聞こえた。男も壁伝いに移動しているようだった。向こうはこちらの気配なんて感じていないのだろうか。あまり遠慮のない音だった。

僕は待った。どんどん近づいてくる音は、それだけで恐怖だった。遠慮がないのは、あの怪物だからでないかという思いを、頭から懸命に追い出した。

やがて、耳の穴にダイビングするかのようにつ、カツ、という音がした。

僕は次の瞬間から起きた、いや、起こした出来事を、これからずっと忘れないだろう。どんなペナルティを受けても、忘れてはいけないはずだ。

男は、気持ちの良いほどあっさり僕の脚に引っかかった。「いてっ」というマヌケな声すら出した。

僕は躊躇しなかった。ナイフを力強く握りしめ、声のしたところへ振り下ろした。とにかく当たりさえすればいいと考えていたが、かなりの手ごたえと共に悲鳴が響き渡った。

僕はもう一度ナイフを振るった。また悲鳴が響いた。もう一度。悲鳴。もう一度。悲鳴。もう一度。悲鳴。もう一度。もう一度。もう一度。もう一度。もう一度。

いつの間にか、悲鳴は聞こえなくなっていた。

明かりがつくのは唐突だった。蛍光灯が忘れられた存在を取り戻し、煌々と光を放った。血みどろの男の背中が視覚に飛び込んできたが、眩しくて僕はすぐに目を閉じた。

しばらく目を開けられなかった。涙が溢れてくる。光に慣れるまで、僕は泣いた。

やがて目も慣れると、倒れている男を確認しないわけにはいけなくなった。僕は彼に馬乗りになっているような状態だった。見たくない、知りたくないと言ってはられない。そこを支配している残酷な事実、僕が作り出したものだった。

男は、間違いなく死んでいる。僕が殺したのだ。

「男、か」

また足りないものに気づいてしまった。名前だ。名前があれば簡単に区別できるのだ。男が活着しているうちに思い出せば良かったな、と少し後悔がよぎった。

いつまでもここにとどまっているわけにもいかず、僕はその場から離れた。必要ないかとも思ったが、ロウソクとナイフも持つことにした。

明かりがついたということは、この建物に生き残っているのは僕だけであるということだった。それが合図なのだ。だんだんと記憶を取り戻しつつある。ほぼこの場所のルールについては思い出していた。僕が受けた、ペナルティについても。

女の死体にたどり着くと、僕は彼女がナイフを持っていないことを確かめた。持っていたなら以前見たときに気がついたらはずだが、念には念を入れて衣服も調べた。やはり、ない。

男の他にナイフを持っていたのは、あの怪物だけだ。だとすると、おそらく女を殺したのは怪物だろう。ナイフは最初から誰かが持っている分ですべてのはずだった。怪物が彼女からナイフを奪い、殺した、とすると辻褄が合う。

ナイフを女が持っていたとわかるのは、僕はこの女に刺し殺されたからだ。

「フラグが立たなかったんだよな……」と僕はつぶやいた。

ペナルティは殺されたために受けたものだ。殺されると、死んだその場から記憶を失った状態でスタートする。

ただし、このルールは僕だけのものだった。他の人間は、おそらく蘇らないだろう。

僕は死体のそばの壁にかけてある油絵と対峙した。記憶に基づいた推定では、出口はここのはずだった。

女に黙祷を捧げたあと、ロウソクの火が消えないよう、僕は守った。

なにから？

風からだ。

油絵はやや斜めにかかっており、壁との間に隙間があった。手を差し入れると、確かに空気の流れを感じる。僕は油絵を外した。ここの物は太抵軽いらしく、大ききの割にあっさりを持ち上げることができた。

油絵で隠されていた壁には、人間の頭ほどの穴が開いていた。穴の周りの壁は他とは色が違った。僕がノックするように拳を打ちつけると、色違いの壁がボロボロと崩れた。

穴の向こうはなにもないように見えた。光も闇もなく、見えている、と言うのがおかしいような、不確かな空間だった。

僕はためらわなかった。どうせ男がハンバーガーを食べているくらいのものだろうとか、待ち受けている光景を楽観視していたわけではない。だが、この誰もいない建物にいたところで仕方ないのだ。

僕はもぐるようにして穴に入り込んだ。

抜け出した先には、草原が広がっていた。

爽やかな風が、身体に新しい芯を通すかのような心地良さを感じさせてくれた。靴ごしの感触は、やわらかな土だった。転んでもそれほど痛くなさそうだ。

僕は戻れたのだろうか。あの閉じた世界から、開けた世界に。

少し歩いてみる。なんら違和感はなかったし、太陽の光を浴びるだけで、生きている実感がした。

しかし、僕の心が緩むのもそこまでだった。

ふと足元に、袋に包まれたハンバーガーが落ちているのを見つけてしまった。大ききは片手で掴めるくらいだった。

いやな予感がした。

ハンバーガーを拾い、袋を開き、かぶりつく。考えてみれば、落ちているハンバーガーなんて食べるべきではないのかもしれないが、そういった感覚はマヒしていたし、なにより確かめなければいけないことがあった。

僕は思わず笑いたくなった。口に入った物体は、まるで味がしなかった。

この世界は、まだ続くのだ。

……まあ、いいか。

すでに、閉じていようが、開いていようが、関係なくなっていた。やり始めてしまっているゲームだ。意地でもクリアしてやると、僕は決意を固めた。